

日本國際問題研究所中國部會編

中國共產黨史資料集

5

勁草書房刊

中国共産党史資料集 第5巻

1972年9月30日 第1版第1刷発行

©編者 日本国際問題研究所
中国部会
発行者 井村寿二
東京都文京区後楽 2-23-15
印刷者 柳川太郎
東京都港区三田 5-7-3

発行所	東京都文京区 後楽 2-23-15 振替東京 175253	株式 会社	勁草書房
-----	-------------------------------------	----------	------

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

図書印刷・和田製本

3331-335503-1836

* 定価は外面に表示してあります。

凡例

(1) 本資料集は、ほぼ五・四運動前後から一九四五年、太平洋戦争が終るまでの中国共産党に関する基本的資料を翻訳採録したものである。選択の基準は、第一に中共中央の発出した重要資料およびコミンテルンの中国関係の重要資料、第二に中共中央に準ずるか、あるいはこれを代表すると思われる個人・団体・政府の名（たとえば、毛沢東・王明・共産主義青年団・辺区政府等）で出された資料、第三に中国共産党と深い係わり合いをもつ大衆的諸団体（たとえば、中華全国総工会等）の名で発表された資料の順である。

(2) 本資料集は全一二巻におよび、各巻毎に、採録した資料についての編注・資料・資料目録・年表・使用文献資料一覧表およびその解題・索引を、この順序に従って掲載した。資料の配列は執筆ないし発表年月日の順とし、年月日の不明のものについてはその資料が掲載された文献の発行日付に従うか、あるいは推定によった。

(3) 複数の原典をもつ資料に関しては、原則として最も早い時期に公表されたと思われるものを原文として採用した。掲載した資料は、今回新たに訳されたものが多いが、従来翻訳され

ていたものについてはこれを参照するか、あるいはその翻訳者の校閲を経て転載したものもある。選択したものうち、日本語訳のみあって原資料の見出し得ないものは、やむをえずそのまま採録した。ただし重要な資料ではあるが、わが国においては、多くを掲載しなかった（たとえば『毛沢東選集』所収の資料など）。

(4) 紙数の制約により、重要と思われるかなりの資料を割愛せざるをえなかったが、本資料集作成の際に蒐集した各種の文献資料の中から重要と思われるものを選び巻末の資料目録に掲載したので、これを参照されたい。資料目録の記述は発表年月日、発出者あるいは著者、資料原名、所収原典の順とし、原典が複数の場合は、原則的にはすべて記した。ただし原典を蒐集しえなかったものについてのみ、後世編集された資料集から採り、その名を記した（たとえば、『赤匪』反動文件彙編、『革命文献』『共匪禍国史料彙編』など）。また同様に原典を見出しえず日本語訳のみがあるものは、やむをえずそれからとった。発出年月日不明の場合は、明記しないまま、その前後を適宜判断

して配列した。

(5) 資料目録を利用する際の便宜のために、とくに重要と思われる事項、および事件を年表として上段に付した。また使用文献資料一覧表では、重要かつ初出のものについてのみ簡単な解題を付した。

(6) 使用文字は資料原名・所収原名および原意を忠実に伝えるのに必要と思われる場合にのみ原文の通りとし、その他は新字体を用いた。

(7) 翻訳文は校閲して用語の統一等を行なったが、責任の所在は翻訳者にあるので、各資料の末尾に翻訳者名を記した。なお訳語は、原則として固有名詞は原語のままとし、その他は翻訳してある。訳文中、「」の部分は訳注あるいは編者注、ないしは訳者が言葉を補ったものである。

(8) 編注は、原則として採録資料の背景（日付、場所、発出

者、前後の状況など）および参考資料をあげるに止めてある。

(9) 本資料集の編纂事業は、第一期に七年、第二期に三年の年月を要した。そのため、途中で編集者に若干の異動があった。各巻の扉裏の編集者一覧に多少の変動が生じた所以である。

(10) 本資料集には、なお不備な点や推敲の不十分なところも多く、また誤りなきを期しがたい。読者各位の叱正を待つものである。

(11) 本巻は、李立三路線出現の端を開いた一九三〇年六月一日の政治局会議から、一九三二年一月二八日の「上海事変」までの時期の重要資料を選択・採録した。この間、一九三一年一月に開かれた中華ソヴェト第一回全国代表大会の諸決定をほぼ網羅するなど、「江西ソヴェト期」初期の党・ソヴェト関係の重要資料を収録してある。

目次

資料1	中共中央政治局 新たな革命の高潮と一省または数省における優先的勝利（一九三〇年六月二日）……………	3
資料2	中共中央 中央通知第一三六号——「八・一」の総示威運動を組織せよ（一九三〇年七月三日）……………	18
資料3	中共中央 中央通告第八三号——ソヴェト政権のために闘おう（一九三〇年七月一八日）……………	21
資料4	中共中央 中央通告第八四号——武装暴動を準備し、ゼネ・ストを組織することについて の指示（一九三〇年七月二日）……………	24
資料5	コミンテルン執行委員会政治書記局 中国問題についての決議（一九三〇年七月二三日）……………	28
資料6	湖南省労農兵ソヴェト政府 穀物・油・塩の最低価格規定についての布告（一九三〇年 八月）……………	39
資料7	チェ・ファ 中国紅軍の長沙占領（一九三〇年八月七日）……………	41
資料8	コミンテルン東方部 ソヴェト区域の土地・農民問題決議（一九三〇年八月）……………	44
資料9	コミンテルン東方部 中国の農民問題についての決議（一九三〇年八月）……………	53
資料10	コミンテルン東方部 ソヴェト区域経済政策についての決議（一九三〇年八月）……………	58
資料11	コミンテルン執行委員会政治委員会 モスクワ孫中山大学での派閥闘争に際して中共代 表団の行った行動の問題についての決議（一九三〇年八月）……………	62
資料12	何孟雄の意見書（一九三〇年九月八日）……………	64
資料13	中国労農兵会議（ソヴェト）第一回全国代表大会中央準備委員会の布告（一九三〇年九月 一二日）……………	76
資料14	中国労農兵会議（ソヴェト）第一回全国代表大会選挙条例（一九三〇年九月一二日）……………	78

資料15	中共六期三中全会 中国ソヴェト第一回全国代表大会開催にあたって民衆に告げる書 (一九三〇年九月二〇日)	82
資料16	少山(周恩来) 中共六期三中全会における報告(一九三〇年九月二四日)	84
資料17	中共六期三中全会 政治状況と党の全般的任務についての決議(一九三〇年九月)	106
資料18	コミンテルン執行委員会の中共中央宛書簡(一九三〇年一〇月)	125
資料19	中共中央政治局 陳韶玉・秦邦憲・王稼豪・何子述四同志の処分取消し問題についての決議(一九三〇年一二月一六日)	135
資料20	朱徳・彭徳懷・黄公略 富田事変についての宣言(一九三〇年一二月一七日)	137
資料21	コミンテルン執行委員会幹部会 李立三路線についての討論(抄録)(一九三〇年一二月)	140
資料22	李立三 党中央政治局と四中全会に宛てた声明書(一九三〇年一二月)	155
資料23	中共六期四中全会 決議(一九三一年一月)	156
資料24	中共六期四中全会 国民會議反対のための宣言(一九三一年一月)	164
資料25	中共ソヴェト区中央局 通告第一号——ソヴェト区中央局の成立およびその任務 (一九三一年一月一五日)	166
資料26	中共ソヴェト区中央局 通告第二号——富田事変についての決議(一九三一年一月一六日)	171
資料27	中共中央政治局 一月一七日の全国総工工会党フラクション會議と江蘇省委員会の報告 についての決議(一九三一年一月二〇日)	179
資料28	中共ソヴェト区中央局 通告第三号——ソヴェトと労働組合との関係の問題(一九三一年)	179

	一月二日)	183
資料29	中共中央政治局 羅章竜の中央委員罷免および党籍剥奪についての決議(一九三一年一月二七日)	186
資料30	瞿秋白の声明書(一)(一九三一年一月)	190
資料31	中共中央政治局 王克全の党籍剥奪についての決議(一九三一年一月三〇日)	194
資料32	中共ソヴェト区中央局 通告第九号——土地問題および反富農の戦術(一九三一年二月八日)	195
資料33	中共ソヴェト区中央局 通告第一〇号——地方武装組織についての戦術およびその組織・工作路線(一九三一年二月)	207
資料34	中共ソヴェト区中央局 通告第一一号——中央局決議執行上の各級党部の誤りを是正せよ(一九三一年二月一日)	215
資料35	中共中央政治局 一九二九—三〇年におけるコミンテルン駐在中共代表団の行動の問題についての決議(一九三一年二月二〇日)	219
資料36	陳紹禹 二つの路線の闘争(一部略)(一九三一年二月)	221
資料37	中共贛西南特区委員会 通告第二〇号——貧農会組織法およびその任務(一九三一年二月頃)	265
資料38	中共中央 党組織を發展させることについての決議(一九三一年三月頃)	268
資料39	中央革命軍事委員会総政治部 通知——調査をしなければ発言権はなく、正確な調査をしなければ同様に発言権はない(一九三一年四月二日)	272
資料40	王克全の声明書(一九三一年五月三日)	274

資料41	中共中央政治局 大衆を動員して反帝運動を拡大する決議（一九三一年六月五日）	280
資料42	コミンテルン執行委員会幹部会の中国共産党宛書簡（一九三一年七月）	288
資料43	中共ソヴェト区中央局 土地問題についての決議（一九三一年八月二日）	308
資料44	中共中央 幹部問題についての決議（一九三一年八月二七日）	314
資料45	中共中央 裏切者―羅綺園・廖劃平・潘問友等についての決議（一九三一年八月二八日）	322
資料46	中共中央 コミンテルン執行委員会第一一回拡大ブレナムの総括を受け入れる決議 （一九三一年八月）	325
資料47	中共中央 ソヴェト区に対する指示書簡（一九三一年九月一日）	336
資料48	特約通信 澎湃たる中国ソヴェト運動――江西の中央ソヴェト区――（一九三一年九月三日）	352
資料49	中共中央 労農紅軍が第三次「困勦」を撃破し、革命的危機が成熟してきたことによつて生じた党の緊急任務についての決議（一九三一年九月二〇日）	361
資料50	中共中央 日本帝国主義の満州武力占領事変についての決議（一九三一年九月二日）	372
資料51	中国各地ソヴェト政府 日本帝国主義の東三省武力占領について全国民衆に告げる書 （一九三一年九月）	378
資料52	コミンテルン執行委員会西欧局・プロフィンテルンヨーロッパ書記局 中国の擁護のため（一九三一年九月）	380
資料53	労農紅軍第三軍団総政治部 政治教育の実施（一九三一年一〇月四日）	382
資料54	労農紅軍第四軍政治部 資金調達必携（一九三一年一〇月一四日）	392

資料55	中央ソヴェト区反帝大同盟規約（一九三一年一〇月一九日）	407
資料56	蘇広 日本帝國主義の満州占領に反対する闘争における満州党部の中心的任務——反日事件についての満州省委の文書に対する批判——（一九三一年一〇月二三日）	409
資料57	中共ソヴェト区党第一回代表大会 政治決議（一九三一年一月）	415
資料58	中共ソヴェト区党第一回代表大会 紅軍問題決議（一九三一年一月）	429
資料59	中共ソヴェト区党第一回代表大会 党の建設問題決議（一九三一年一月）	434
資料60	第一回全国ソヴェト代表大会 中華ソヴェト共和国憲法大綱（一九三一年一月七日）	450
資料61	第一回全国ソヴェト代表大会 中華ソヴェト共和国臨時中央政府の對外宣言（一九三一年一月七日）	454
資料62	第一回全国ソヴェト代表大会 中華ソヴェト共和国十大政綱（一九三一年一月）	456
資料63	第一回全国ソヴェト代表大会 中華ソヴェト共和国労働法（一九三一年一月）	457
資料64	第一回全国ソヴェト代表大会 中華ソヴェト共和国土地法（一九三一年一月）	467
資料65	第一回全国ソヴェト代表大会 紅軍問題決議（一九三一年一月）	472
資料66	第一回全国ソヴェト代表大会 經濟政策についての決議（一九三一年一月）	475
資料67	第一回全国ソヴェト代表大会 中国労働紅軍優待条例についての決議（一九三一年一月）	478
資料68	第一回全国ソヴェト代表大会 中国国内の少数民族問題についての決議（一九三一年一月）	481
資料69	中共中央 土地問題についての中共ソヴェト区中央局宛書簡（一九三一年一月一〇日）	484
資料70	陳昌浩 鄂豫皖ソヴェト区の反革命肅清工作の詳情についての報告（一九三一年一月二三日）	494

資料 71	中華ソヴェト共和国臨時中央政府 婚姻条例についての決議および婚姻条例（一九三一年二月二十八日）	507
資料 72	中華ソヴェト共和国臨時中央政府中央執行委員会 布告第一号（一九三一年二月一日）	510
資料 73	中共湘鄂西省委員会 鄧中夏同志についての決議（一九三一年二月九日）	512
資料 74	中華ソヴェト共和国臨時中央政府中央執行委員会 訓令第六号——反革命事件の処理手續および司法機關を樹立するための暫行手續（一九三一年二月一三日）	516
資料 75	中華ソヴェト共和国臨時中央政府中央執行委員会 ソヴェト建設についての重要訓令（一九三一年二月一五日）	519
資料 76	中共中央 ソヴェト区赤色労働組合の任務と当面の工作についての決議（一九三一年二月二日）	521
資料 77	中共ソヴェト区中央局 紅軍拡大問題決議（一九三一年二月二五日）	528
資料 78	中華ソヴェト共和国臨時中央政府中央執行委員会 合作社暫行組織条例（一九三一年二月二七日）	532
資料 79	中央革命軍事委員会總政治部 中国労働紅軍政治委員工作暫行条例（一九三一年末）	533
資料 80	中央革命軍事委員会總政治部 中国労働紅軍内党支部ならびに団委員会工作暫行条例（一九三一年末）	536
資料 81	中央革命軍事委員会總政治部 中国労働紅軍士兵会規約（一九三一年末）	545
資料 82	中共ソヴェト区中央局 ソヴェト区域における反革命肅清工作についての決議	

目 次

資料 83	中共中央 一省または数省における革命の首先的勝利の獲得についての決議（一九三二年一月九日）	549
資料 84	洛甫（張聞天） ソヴェト政權と民衆政權を論ず（一九三二年一月一九日）	557
資料 85	中共ソヴェト区中央局 全国におくる通電（一九三二年一月三〇日）	570
資料 86	中華ソヴェト共和国臨時中央政府 帝國主義の中国分割と帝國主義大戰について全国に 発する通電（一九三二年二月一日）	572
資料 87	中共中央 上海事件についての闘争綱領（一九三二年二月二日）	574
資料 88	欧米各共產党の中国革命とソヴェト連邦擁護のアピール（一九三二年二月）	576
資料 89	中共中央 反日戦争はどうすれば勝利できるか（一九三二年二月二六日）	579
資料 90	中共中央職工部 一九三一年の労働運動の総括（一部）（一九三二年）	580
資料目録		595
使用文献資料一覧表		
索引		

中國共產黨史資料集

第五卷

資料1 中共中央政治局

新たな革命の高潮と一省または数省における首先的勝利

(一九三〇年六月一日)

「新的革命高潮與一省或幾省首先勝利——」

一九三〇年六月十一日政治局會議通過目前政治

任務的決議——」(『紅旗』第二二期 一九三

〇年七月一日刊 一一四ページ)

〔編注〕李立三指導下の中共中央が採択した代表的決議。その原型は、一九三〇年二月の中共中央第七〇号通告に求められる(Richard C. Thornton, *The Comintern and the Chinese Communists, 1928-1931*, Seattle, 1969, pp. 111-117)。この時、李立三は、紅軍の成長、軍閥の混戦、世界恐慌などの諸条件によって革命の好機が到来したと判断し、世界革命に呼応して中国革命を爆発させることをもくろみ、とくに武漢周辺の大都市を武力占領することを計画した。この時期の李立三の考え方は、本資料のほか、紅軍と都市プロレタリアートを結びつけるべきことを論じた『紅旗』第八八期社論「準備建立革命政權與無產階級的領導」(三月二十九日)、産業都市を獲得しないかぎり勝利の条件はないことを論じた『紅旗』第九〇期論文(四月二日、第四卷資料44)、中国革命を世界革命の主柱と論じた『紅旗』第九二期論文(四月二日、第四卷資料45)などに見ることが出来る。またこの時期における李立三と毛沢東との関係について

は、四月二十六日、中共中央の第四軍前敵委員会宛ての書簡が指摘され(原文は *Tso-ling Hsiao, Power Relations within the Chinese Communist Movement, 1930-1934*, Vol. II, 1967, Seattle, pp. 27-28)、最近のソ連側解説書は、「中央のこの指令は毛沢東自身の意図にも合致するものであった」としているが(『国際労働運動研究所編、国際関係研究所訳「コミンテルンと東方」一九七一年、二八〇ページ)、詳細はなお不明である。また毛沢東が、中国革命軍事委員会主席の名によって全面的に李立三支持の意志を表明したものとされている七月の通電は、波多野乾一「資料集成中国共産黨史」(第一卷五一〇ページ)に見られるのみで、原文は見当たらない。

「六一」決議はかなり遅れて七月一日付『紅旗』に発表され、この決議と同時に黨員の理解を助けるためいわゆる「討論大綱」が付された。なおこの決議は党内で論議を呼んだらしく、六月末から七月初め党工作員討論會議で本決議の内容が討議されているといわれる(陳紹禹「二つの路線の闘争」(『資料36』参照)。また、七月一六日の『紅旗』第二二〇期の立三「再論革命高潮——是名詞的爭論、還是原則的爭論?」も当時の論争点を知るうえで重要である。

一 中国革命と世界革命

(一) 最近の国際的諸事件の發展、すなわち海軍(軍縮)會議以降の各国の軍備(拡張)競争の激化、フランスとイタリアの衝突の尖鋭化、英日米が懸念に操縦している中国の軍閥戦争は、明らかに帝國主義戦争の危険のより一層の切迫を示している。白系ロシア人の擾亂を極力利用しようとする日本の陰謀、ヨーロッパ合衆国を組織し、一致してソ連に進攻しようとするブリ

アンの企図、米州各国を指弾してアメリカの対ソ絶交、ソ連をとりまく各小国、ポーランド・リトアニアなどの英仏帝国主義の指麾下の軍事動員等は、帝国主義の一致した対ソ進攻の切迫をより一層表明している。これは、全世界の資本主義がいずれも重大な恐慌の時期に達し、その和解しがたい根本的矛盾のために、このような解決しがたい深刻な危機を産みだしているからである。他方では、各国労働者階級のスト風潮の激しい高揚、失業者闘争の拡大、とくにソ連の社会主義建設の偉大な成果が社会主義革命に対する労働者階級の信念をより一層増大させ、社会民主主義政党およびその左派が、大衆の間における彼らの地位を日ましに喪失し、コミンテルンと各国共産党の大衆の間での威信が日ましに高まってきている。とりわけわれわれの重大な注意を喚起するものは、世界のすべての植民地にゆきわたった革命運動の高揚、すなわちインド革命の高潮、安南の暴動および他の植民地各地の騷擾、中国革命の急激な発展など、これらのすべてが全世界を支配する帝国主義の基礎を揺り動かし、していることである。このことから、帝国主義のより一層さし迫った企図は、まず第一にソ連に進攻することによってみずからの危機を救うことであり、したがって対ソ進攻戦争が当面の主要な危険になっている。このようにして全世界に広まった重大な経済恐慌と政治的危機こそ、空前の世界的大事件と世界的大革命的時期が、われわれの目前に迫っていることを物語るもの

である。この国際情勢は、疑いもなく中国革命の発展にとつて有利な条件であり、一九二五—二七年の第一次大革命のときはまったく異なった優れた条件である。

(二) 帝国主義の支配する世界でみると、中国は帝国主義のあらゆる根本矛盾がもつとも集中した、もつとも尖鋭化した地点である。中国は、世界の主要帝国主義——英日米——の衝突がもつとも激烈な地点であり、資本主義世界と社会主義のソ連とが直接に接触している地点の一つであり、植民地の反帝国主義革命がもつとも深化している地点であり、同時にブルジョアジーに対する中国プロレタリアートの闘争ももつとも尖鋭化しやすいのである。たとえば、現在の労働者の毎回の経済闘争は、いずれも急速に深刻な政治闘争ないしは武装衝突にまで転化しているのである。このように、帝国主義のあらゆる矛盾はすべて中国に集中しており、しかももつとも尖鋭化しやすく、ついには中国の救いがたい経済的・政治的危機をつくりだし、不断の軍閥戦争をつくりだし、支配階級が安定しようもなく、日に日に崩壊していく土台をつくりだし、労働者階級と広範な動員大衆が日ましに革命化し、自己の解放の活路を見出し、いくほかない状態をつくり出しているのである。したがって中国は、帝国主義が支配する世界でのもつとも弱い鎖の一環、すなわち世界革命という火山がもつとも爆発しやすいところである。したがって、全世界の革命的危機がすでに重大化している現在の